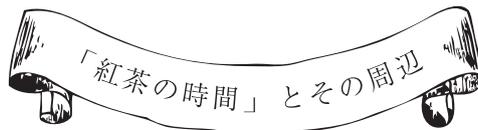


きもちは、 言葉を さがしている



第45話

水野 スウ

17年目のおはなし会

東京調布のレストラン、心の病気をした人たちの居場所であり働く場所でもあるクッキングハウスでのおはなし会は、今年で17回目となりました。代表の松浦幸子さんから毎年違うテーマでご注文があり、今年のそれは「文化と憲法」。最初にこのテーマをいただいた時、一瞬何を芯に話そうか困惑したけど、ほどなくタイトルが「ともに生きる文化としての憲法——憲法はあなたのそばにいつもいるよ」になったと連絡をもらう頃には、私自身でもいくつかの新しい発見があり。まさにそのようなことを話そうと考えていたので、はからずも松浦さんの思いとシンクロしました。

年に一度、「スウさんのピースウォーク」の通しタイトルのもと、クッキングハウスで語ることは私にとって自己定点観測のようなもの。今回のマガジンは、今年の観測を振り返りながら、その後のうれしいニュースもあわせてご報告したいと思います。

「文化」のブレインストーミング

時はオリンピック間近の東京、ウイルスに感染した人の数がどんどん増えつつある時期と重なり、おはなし会は去年に続いて、お客さま向けとメンバーさんたち向けの2部制として、2日に分けて開かれました。

両日ともまず最初は、「文化」という言葉のはいる単語か、「文化」というワードから連想するものを、思いついたそれぞれが自由に出しあうブレインストーミングから。

文化、という言葉がはいるものとしては——多文化／異文化／文化会館／文化祭／食文化／文化活動／文化勲章／伝統文化／文化庁／文化大革命／文化人／文化住宅／文化生活／文化財／江戸文化／福祉文化／文化の日／文化交流／文化放送／文化服装学院／文化包丁／文化度／文化圏……etc.

文化包丁、文化住宅、にはちょっと笑いが出ました。今はほとんど使われない言葉だけど、当時は、新しいこと、先進的なこと、の代名詞だったのかも。文



化人、という言葉も、わかるようなわからないような。

文化からイメージしたものとしては——芸術／一緒に歌を歌う／言葉・文字をつなぐ／余暇を持つ／人間の品位／人間らしい／お互いの気持ちを語り合える環境、……etc.

そんな言葉がでるたび、あ～あ、うんうん、といった声もれます。

いずれにしても、文化はものすごく幅広くて、括ることがむずかしくて、一つの言葉でこうと定義できないものみたい、と共有しあったところが、この日の話の入り口です。

クッキングハウスの文化

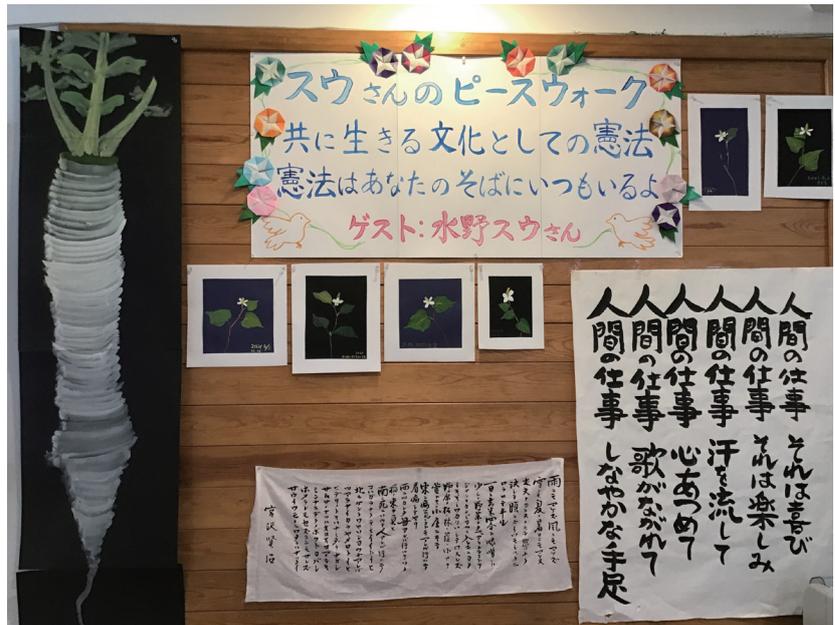
ブレンストーミングで「食文化」という言葉が出てきましたが、クッキングハウスにはまさにおいしい家庭食文化があります。

おはなし会の日のレストランのランチメニューは、夏野菜たっぷりカレー、椎茸しめじのうっすらあんかけ茶碗蒸し、信州の織座農園から定期便で届く有機無農薬野菜の彩り豊かなピクルス、コリコリ歯ごたえのお漬物、じっくりいいいに出しをとった科学調味料無添加のお吸い物。食材には、クッキングハウスを応援する全国の人から送られる自家製野菜がふんだんに使われています。

そもそもクッキングハウスは、34年前のワンルームマンションの時代から、松浦さんとメンバーと一緒に食事をつくり、そのごはんを一緒に食べ、おいしいね、から元気になっていく場としてスタートしたのです。レストランを始めるより先に、クッキングハウスの原点にまず、一緒につくり一緒に食べる、「食文化」があったのでした。

ブレンストーミングでは芸術という言葉も出てきましたが、クッキングハウスにはメンバーさんたちの描いた絵が壁のあちこちにかざられていて、レストラン全体がアート空間のよう。ほぼ毎週、「キミ子方式で絵を描こう」というプログラムがあって、上手に描こうとしなくていい絵を、自由に思い思いに描くのです。紙が足りなくなったらどんどん紙を足して行って描くので、大根もこんなに伸び伸びしています。

大根の絵の右にあるのは、この日のおはなし会の看板です。クッキングハウスでイベントがある時はいつも、こんな看板をメンバーさんが手づくりしてくれて、私のおはなし会の時も、毎回、このやさしい看板を背にして語ります。お話しする私、そして、この場に集う一人ひとりを、「ようこそ」とあたたかく迎えてくれるこんな空気もまた、クッキングハウスに根づいている文化の一つです。



対話する文化

クッキングハウスでは、心の病気について学ぶメンタルヘルス市民講座、コミュニケーションを練習するSST、サイコドラマ、リハビリを語りあう会、といった豊かな学習プログラムがありますが、どの会も最後に必ずシェアリングの時間を持ちます。メンバーさんたちの土曜ランチ会の後も、もちろん毎年のピースウォークおはなし会の後も。

その時間に一人ひとりが感じたことを言葉にして語り、みながいてねいに聴き、気持ちを分かち合う。クッキングハウスではそれが当たり前だけど、ほかの勉強会や講演会では必ずしもそうでないことも多いから、シェアリングタイムの自由で平らな空気に、初参加のお客さまの多くが感動します。はじめ緊張していた人も、メンバーさんたちの素直で率直な感想を聞き、そうか、ここはカッコつけたこと言わなくていい、思ったままを言っている場所なんだ、とだんだん正直なきもちを話せるようになっていく、そんな場面をこれまで何度となく見てきました。

フィンランドの精神病院ではじまったあたらしい治療法、オープンダイアログのことを、近頃は日本でもよく聞くようになりました。医師が一方向的に病名をつけて薬を出すのではなく、患者本人が一番困っていることを、その人とつながる人たち、家族やドクター、医療スタッフが一堂に会して、その人がどうなりたいかを聞き、どうすればその人の希望に近づいていけるかを話しあって、本人とともに見つけていくというもの。クッキングハウスでもそのやり方を学んで、最近ではメンバーの話をする時には松浦さんとスタッフが一緒に聞きあい、ひらかれた対話でそのメンバーさんにとっての一番いい方法を探るようになってきたそうです。その根底にある理念は、もともとクッキングハウスがもっていた文化と通じている気がします。

オープンダイアログも、シェアリングも、毎朝仕事始めにする気分調べも、クッキングハウスではあらゆる場面で気持ちを言葉にして、聴きあって対話する、そのことを何より大切にしているのです。

この場は何だろう

最初にしたブレインストーミングで、文化のとらえ方は実にいろいろあるとわかりました。文化勲章や文化庁から補助金が出るものだけが文化ではないということも確認しました。それらが上から押し付けられたり、お墨付きを与えてもらう文化だとしたら、食べること、表現すること、語り合うこと、歌うこと——クッキングハウスでしているこうした日々の営みは、まるごとピープルの文化です。

今日のテーマは「文化と憲法」だけど、じゃあこの文化はどんなふう憲法とつながっているだろう。たとえば、私がいま話しているこの場は、憲法とどんな関係があるでしょう、と問いかけると——「こういうおはなし会ができるってこと、表現の自由の21条だと思う」と、参加している方から声が上がります。

本当にそうです。こうして集うことも、平和や憲法について語りあうことも、表現の自由の21条に支えられています。

自分の思ったことを言えたり、違う意見や感想を持つことができるのは、「思想および良心の自由はこれを侵してはならない」とする19条で心の自由が保障されているからです。

安心しておいしい食事が食べられることは、人間らしく生きるのに欠かせない、健康で文化的な生活をおくるための25条の生存権です。クッキングハウスでは、生活保護が必要なメンバーさんが保護をうけられるよう、ソーシャルワーカーの松浦さんが手伝ってその手続きをしますが、それも25条を使うこと。

一人ひとりが個人として尊重される、と謳う13条は、クッキングハウスが常日ごろもっとも大切にしていることで、今日この場に満ちています。「ここでは誰もが平らだから、法の下での平等の14条かしら」という声も。

でも前の憲法のもとでは、自由に集まったり、表現したり、自分の考えていることを話したりすることには制限がかけられていました。人々が、集い、語りあい、学びあって育んでいくピープルの文化は、

今ある憲法がいつもそばにいて、私たちの自由や権利を下支えしてくれているからだったと気づきます。人類の叡智がつまっていると言われる今の憲法は、ある意味、文化のかたまりみたいなものなのかもしれませんね。

土壌の話



この本の表紙の人は、ベアテ・シロタ・ゴードンさん。彼女は、GHQの憲法草案委員会の人権条項を担当した一人として、今の憲法にある、法の下での平等、男女同権の14条、婚姻は当事人

の合意によってのみ成立するという24条を、1946年、日本国憲法草案の中に書いてくれた人です。

だけどそれがすんなり憲法に書き込まれたわけじゃありません。ベアテさんは草案を書いただけでなく、日本政府とGHQが草案を検討する場で通訳もしていました。ベアテさんの書いた人権条項、特に男女平等については、政府側から「日本には女性と男性が同じ権利を持つ土壌はない。日本女性には適さない条文が目立つ」と目の前で批判されて、あやうく没になるところだったそうです。(『1945年のクリスマス——日本国憲法に男女平等を書いた女性の自伝』より ベアテ・シロタ・ゴードン 柏書房)

松浦さんから最初に「憲法と文化」のお題をもらった時、その二つは保守の文脈で語られることが多かったの、実は一瞬、ん？ととまどいました。たとえば、自民党憲法草案2012年版の前文には「長い歴史と固有の文化」という表現がでてきます。固まった文化、揺るぎない文化、というイメージ。これって、何十年前に「日本には女性と男性が同じ権利を持つ土壌はない」と日本政府側が言い切ったあの言葉と、根っこで重なる気がします。

男性と女性が同じ権利をもつ土壌はないってどう

いうこと？ 自分で決めたり、選んだり、政治に参加したりすることを、男性には認めて、女性には認めない、そういう不公平なままだが“日本らしい”ということ？ それって人間らしくない気がします。一人ひとりが人間らしく生きられない文化ってなんなのだろう。文化は、ピープルが生きることとともにあるのではないの？ 松浦さんからお題をもらったとき、これは改めて私が、政府から押し付けられる「文化」でなく、ピープルが生きることとともにある文化を考える挑戦だ、と思いました。

キーワードは「耕す」

「文化」をあらわす英語は culture。似ている単語に「農業」を意味する agriculture があります。

クッキングハウスで話す今年のテーマを夫に伝えたら、即、半世紀以上も前の思い出を聞かせてくれました。高校3年生の夏休み、石川から上京して代々木ゼミナールに行った初日のこと、たまたま英語の長文を訳す授業があって、その時初めて彼は「agriculture」という単語が「農業」を意味すると知ったのだとか。アグリは土、カルチャーは耕す。だから、土を耕すで農業なのか！と。夫の代ゼミ体験はその日かぎり、後はまったく授業に出なかったそうで、そのひと夏に彼が学んだのは、唯一この英単語だけだったそうですが(笑)。

そう、culture という単語には文化だけでなく、育てる／耕作する／栽培する／手入れする／世話する／守る、という意味もあるのです。語源はラテン語の cultura。ちなみに cult は、称える／神を崇拝する。cultivate は、栽培する／心を耕す／教養／文化、といった意味があります。なんと幅広い概念でしょう。

文化と憲法をセットにしてクッキングハウスで語るなら、その日のキーワードはきっと「耕す」だ。土をふかふかに耕し、そこにタネを蒔き、世話をし育てる、そういう営みが文化に通じているのではないか。そう、このとき確信したのです。

耕すはキーワード、と見つかったとき、もう一つ思い出したエピソードがありました。

この5月、全国うたごえ創作講習会によばれて話

をした時（その時の報告はマガジン45号44話に）、私にはほんの数える程しか歌づくりの経験はないけど、代表曲(!)は、なんてたって「13条のうた ほかの誰とも」です、と言い切りました。

もとは2009年に、娘が憲法13条の「個人の尊重」——「一人ひとりが個人として尊重される」という条文に深い意味を見出して、それを「わたしは、ほかの誰ともとりかえがきかない」からはじまる、やさしい日本語に訳してくれたことが始まりでした。

その訳文はまるで詩のようで、ああ、これを歌にできたらいいなあ、と思っていたら本当に歌ができて、それを憲法のおはなし出前の最後にいつも歌い、ついにはCDブックまでつくってしまった。13条のなんともめざましい進化に私自身、びっくりです。

それから何年もたったある日、娘がぼろりとこんなことを。

「私はたしかに13条を発見して私なりに訳したけど、でもそれっきりであとはほったらかした。私の13条に水をやって、太陽にあてて、風を通して、ここまで育てくれたのはあなただよ。そうでなかったらあの13条、とっくの昔に干からびてたと思う」

干からびてた！ この表現がリアルでおもわず大笑いしたけど、そうか、娘の訳した13条を、私は私なりに耕し続けて歌にして、何度も歌ってきたのか。耕すってこういうことか、と実感しました。今回のキーワードが「耕す」だと思った時、娘とのこの日の会話も鮮やかに思い出されたのでした。

干からびさせないために

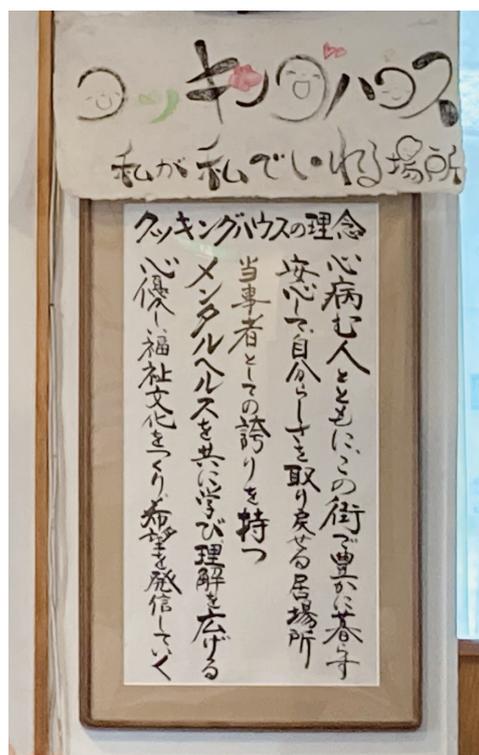
男女が同じ権利をもつという土壌は日本にないのだ、と政府の側が反対する中で、ベアテさんが、日本国憲法というまだ固い土の中に植えてくれた「男女平等」のタネ。だけど、憲法に書き込まれたらそれで終わりじゃなくて、それを受けとり、そこから勇気をもらって、水をやり、耕し、育てた戦後の人たちがたくさんいます。

日本のジェンダーギャップ指数が156カ国中120位と低い(2021年)のは、日本の土壌がまだまだ硬くて耕し足りないことの証拠。それならその土がふかふかになるまで私たちが耕していけばいいのです。

クッキングハウスの通信には、「一緒に」「ともに生きていくために」という松浦さんの言葉が何度も何度も出てくるけれど、それはひとりが人間らしく生きていくのにパンだけでは足りないことを、松浦さんが誰よりもよく知っているからだと思います。他者とまじわり、仲間をつくり、一緒に文化を育てて、ともに味わう。それが、人間らしく生きるということ。

心の病気の人々がレストランで働くなんで無理だ、と言われた時代。憲法に「法の下での平等」と書き込まれていても、まだまだ心の病気の人々への偏見が強く、必要な制度も用意されていなかった、そんな時代から35年。松浦さんは仲間とともにクッキングハウスという畑を耕し続けました。平等、という理念が干からびてしまわないよう、水をやり、耕してきたのです。

毎日のおいしいごはんや歌や絵が、一つひとつは小さな対話の積み重ねが、クッキングハウスの畑を豊かに耕し続けてきました。やわらかく耕されたクッキングハウスの土は、心の病気を体験したメンバーたちだけでなく、レストランで食事をするお客さま、講座やイベントに参加する市民の方たちの心をも耕し、そうやってともに心やさしい福祉の文化を育んできたのだと思います。



クッキングハウスの松浦さんはその功績が認められ、2005年に第2回精神障害者自立活動支援賞（リリー賞）を受賞、今年11月には、調布市より社会福祉功労賞の表彰を受けました。

タネを蒔いた人

これまでクッキングハウスのいろんな文化を述べてきたけれど、クッキングハウスを語るとなったら、やっぱり歌の文化を抜きにして語ることはできません。なぜならクッキングハウスはいつも歌がある場所だからです。そのタネを、四半世紀余りも前、クッキングハウスという畑の土に最初に蒔いたのはフォークシンガーの笠木透さん。

笠木さんとの出会いをこの場で松浦さんにお聞きすると、こんなふうに語っていただきました。

——1987年にクッキングハウスをはじめた時、小さな居場所で私も不安だったので、何か私自身を励ましてくれるような歌を求めていたのです。そんな時、笠木さんの歌を知りました。いつかこの方をクッキングハウスでお呼びできたら。そう願い続け、クッキングハウス5周年のときによくお呼びすることができました。

笠木さんにはじめて会った時は、ゴリラみたいな人！（笑）と。でもそのコンサートの間中、いつもはちっともじっとしていない自閉症の男の子がしっかり歌を聞いていたの。それから、かん黙症で言葉の出ないメンバーが、笠木さんの歌う替え歌がすごく気に入って、よろこんで歌い、言葉が出るようになっていった。

笠木さんは、「心の病気をした君たちだからこそ、歌がつかれる。歌いたい思いが、伝えたい気持ちが、あるでしょう、歌をつくってごらんさい」そう言って私たちに歌づくりを教えてくださいました。

自分たちの歌を持つということ

「♪不思議なレストラン 心の居場所 ここにいてもいいのですね」今やクッキングハウスのテーマ

ソングになっている「不思議なレストラン」という歌の歌詞をプレゼントしてくれた笠木さん。その後、笠木さんが手ほどきするかたちで、メンバーや松浦さんやスタッフたちの歌づくりがはじまりました。

めいめいが書いてきた歌詞を発表して一つひとつシェアし、時には別の人の歌詞を足し、何人もの曲があわさって一つの歌になっていったり。そんな歌がクッキングハウスにはもう30曲以上あるそうです。25周年、30周年記念コンサートの大舞台上で歌われた歌はどれもみな、クッキングハウスのオリジナルソングでした。

笠木さんが歌づくりのタネを蒔き、それをクッキングハウスの人たちがせっせと耕し、大切に育ててきた。笠木さん亡き後は、彼の歌仲間の増田康記さんが引き継いで一緒に耕し続けてくれています。

これは自分たちの歌だ、そう呼べる歌をいっぱい持って、しょっちゅう一緒に歌って、この場にいつも歌があること、これもまたクッキングハウスのすばらしい文化です。

クッキングハウスでは、来たる2022年の35周年を祝うコンサートで歌うための、新しいオリジナルソングの練習がもうはじまっているそうです。35年間耕され、育ててきた歌は、クッキングハウスの畑に咲く彩り豊かな花や実りのようなもの。その歌は歌われることでメンバーたちの、そして聞かせてもらうことでお客さまたちの、心の土壌をさらにふかふかに耕すことだろう、と確信して、来年11月のコンサートを私は今から心待ちにしています。

クッキングハウス35周年を祝う会

「私のリカバリー 私達のリカバリー
～心の居場所から、希望のプレゼント」

日時：2022年11月17日（木）13:30-16:00

場所：調布市グリーンホール（大ホール）

参加費：3,000円

お申し込み・お問い合わせ：

042-498-5177（クッキングハウス）

